

産科施設から遠隔地に住む妊産婦の不安

溝口祥代 田上志保 山下真由 吉田真奈美 藤井友紀 川上舞子

指導教員 中塚幹也

【緒言】

近年、妊婦健診施設、分娩施設は減少の一途をたどっている。これらの施設までの距離が遠いことで、安全性の確保が困難となる場合もあり、妊産婦にとっては大きな不安となっている可能性がある。今回、私達は、産科施設から遠隔地に住む妊産婦が抱える身体的、経済的、精神的問題を明らかにするため調査を行った。

【方法】

1. 調査対象

2007年9～11月の3ヶ月間に、倉敷市・新見市・備前市・真庭市・美作市に住んでおり、過去4年間に分娩経験のある女性570例を対象とした。対象女性570例の年齢は 31.4 ± 4.7 (mean \pm S.D.) [19～45]歳であり、一番下の子どもの年齢は月齢平均2歳0ヶ月 \pm 1歳3ヶ月[0歳1ヶ月～4歳0ヶ月]であった。

2. 調査方法

同意のもと、乳児健診、1歳6ヶ月健診、3歳児健診にて無記名の自己記入式質問紙を配布し、回収箱に投函する形で回収した。回答に記入のなかった項目に関しては、有効回答数を示した上、有効回答のみを解析した。尚、本研究は、岡山大学医学部保健学科倫理委員会の承認のもと施行した。

【結果】

1. 妊婦健診施設、分娩施設

妊婦健診施設までの所要時間は平均29.2分であり、分娩施設までの所要時間は平均26.4分であった。分娩施設を選んだ理由として「近いから」と答えた人が最も多かった。

2. 妊娠、分娩に関して

ほとんどの人が分娩時に夫が付き添っていた。分娩方法は約7割の人が自然の経膣分娩であり、入院理由としては陣痛に続き、破水との回答が多かった。半数の人が分娩時に何らかの不安を抱えていた。

3. 支援、サービス利用、満足度

妊娠、分娩時に妊婦の支えになっているのは夫が最も多く、次いで実母が多かった。妊娠・分娩時の地域サービスの利用率は低かったが、約8割の女性は地域サービスを希望しているとしていた。妊婦健診、分娩に対しておおむね

満足感が得られていたが、半数の人が地域の産科医療体制に不満足としていた。

4. 分娩施設を遠いと感じるかどうか別の検討
分娩施設を遠いと感じているほど分娩への不安が大きく、産科医療体制に対し不満が強く、分娩の満足度低下につながっていた。

5. 分娩施設までにかかる時間別の検討

分娩施設までの距離が長くなるとともに不安が増加しており、地域の産科医療体制不満を感じている女性が多かった。施設までの距離が遠くなるにつれ、分娩時の入院理由で、自然な経過である「陣痛発来、破水」が減少し、中には、遠方のため事前に入院した例も見られた。「自然経膣分娩」の比率が低くなり、「予定帝王切開」が多くなっていた。

6. 居住地別の検討

倉敷市に比べ、真庭市、新見市、備前市、美作市では分娩施設までを遠いと感じる人が多く、「分娩施設まで行くための距離・時間」に対する不安が大きく、地域の産科医療体制に対しても不満を持っていた。また、倉敷市では「陣痛発来・破水」で入院する人が多かったが、これに比較して他の4地域では低率であった。また、分娩様式に関しても、倉敷市に比較して、他の4地域では、「自然経膣分娩」の比率は低く、「予定帝王切開」の比率が高かった。

【考察】

妊婦にとって分娩施設までの距離が遠いことは移動の身体的な負担のみではなく、精神的にも不安の原因となっており、これが強い場合は、産科医療体制への不満や分娩自体の満足度の低下につながっていた。

現時点では、産科医療施設が増加する可能性は低く、分娩過疎地域では、妊婦のこれらの不安に対して、行政によるきめ細かいサービスの充実が望まれる。

【結論】

岡山県においても、分娩施設の減少により、分娩施設から遠方に住む妊婦が増加している。妊娠・分娩に関する地域サービスの整備により、いかに妊娠・分娩に対する不安を減少させ、安全で安心できる分娩を行なえるかが、これからの課題である。